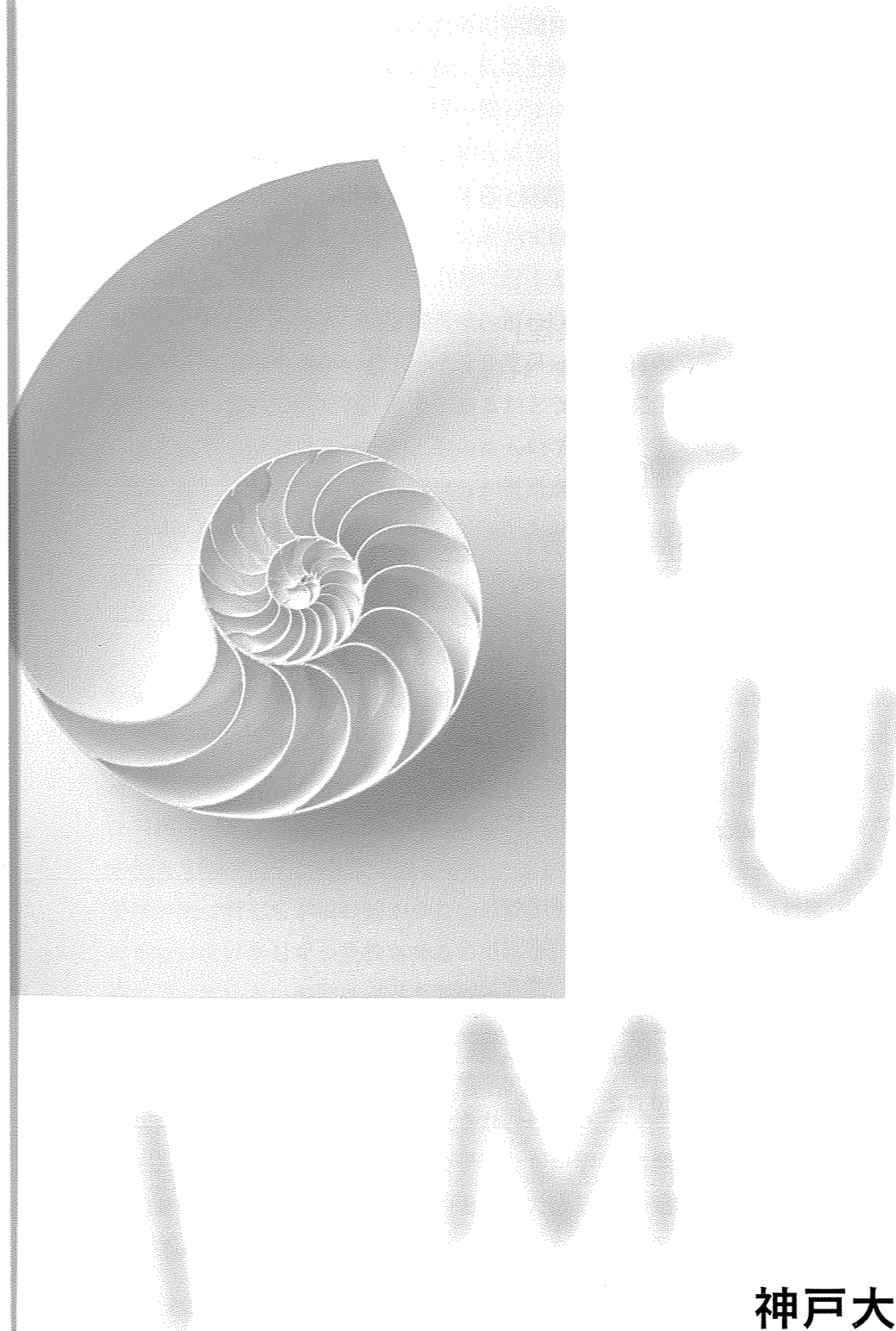


第14回
文窓賞優秀作品集



発行

2020年10月26日
神戸大学文学部同窓会
文窓会

<http://www.bunsokai.com/>(文窓会)
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/>(神戸大学文学部)

2020年10月発行

文窓会
神戸大学文学部同窓会

第14回 文窓賞 学生レポートコンクール 入賞作品

優秀賞

「旅の途中の文学部」
薄 まなみ (1回生)

佳作

「2020年、文章と関わる」
伊藤 和音 (1回生)

「4年半の不条理」
井野 成実 (哲学専修 4回生)

新人賞

「不器用な世界」
米谷 実紗 (1回生)

◎ 選考会 2020年9月24日

◎ 応募総数 14作品

◎ 選考委員

西川 京子 (審査委員長)

奥村 弘 研究科長 (日本史学教授)

長坂 一郎 副研究科長 (心理学教授)

樋口 大祐 副研究科長 (国文学教授)

武藤 美也子 日高 健一 三宅 征彦

田中 賢司 廣野 幸夫 吉田 浩次

坂本 直樹 中畑 寛之 津田 薫

優秀賞

旅の途中の文学部

薄 まなみ (1回生)

高校を卒業し、大学生になるための準備に追われているはずだった18歳の春、私は上海にいた。人生初の挫折を味わい、唯一残っていた大学生になるための切符を握りしめたまま、偶然手にした上海旅行に出かけた。その上海旅行は、応募していた作文コンクールの副賞で、ともに受賞した4人の学生と共に上海に行くというものだった。実は上海は2度目で、前に訪れたのは5年前の中学生の時だった。2度目の上海であり、傷心旅行であり、楽しめるかどうかは行く前から疑問であったが、他の4人の学生と話していると、意外なことに自分が進路選択の分かれ道にいることを自然と忘れることができた。

私は高校3年間で様々な国に行き、多くのことを経験した。その中でもカンボジアとアメリカは私の将来選択に大きな影響を与えたと思う。カンボジアで小学校を訪問したのだが、教室に電灯がないことや、中庭と教室の間に窓ガラスがないことに驚いた。何より驚いたことは、子供たちが半日しか学校で過ごせないことだ。子供の数に対して学校の数が少ないので、生徒を半分に分け半日ずつ登校させるのである。学校に行っていない時間は家計を助けるため、アンコールワットなどの観光地で観光客にお土産を売る。学校では目をキラキラさせていた子供たちが、観光地では観光客に無視され、悲しい目をしている。私はカンボジアの子供たちが学校で見た、あの笑顔を守りたいと思った。そしてアメリカでは国連のニューヨーク本部を訪

問し、実際に世界各地で様々な問題に取り組んでいらっしゃる方々に出会った。漠然と私も世界を舞台に働きたい、と思うようになった。このような経験から、私は世界の現状、国際的な支援活動についての勉強をしたいと思い、そのようなことが学べる学部に行こうと思っていた。上海に行ったときに唯一残っていた大学生への切符の行き先も国際関係の勉強ができる予定の学部だった。いずれにしても高校生の時に文学部に行く予定は全くなかった。

そんな私が上海に降り立った時、5年前とは違う空気を感じ取った。5年前に行ったときの上海のイメージは、街にごみが散乱しており、トイレは流れず、衛生的に良いイメージではなかった。しかし、5年後の上海は見違えるようにきれいになっており、街や地下鉄はきれいに整備され、トイレはきちんと流れるようになっていた(これに1番感動した)。さらに、上海に住む日本人の方に話を聞くと、上海は財布を持っていなくても生きていけるが、スマートフォンを持っていないと生きていけない、とおっしゃっていた。上海ではここ数年で急激にスマホ決済が普及し、スーパーやデリバリー、タクシーなど、ほとんどがスマホ決済になっていた。私はこの話を聞いた時、5年前の上海からは想像ができずにとっても驚いた。たった5年でこんなに変わるものか、と中国の経済や政治について興味を持った。そして何より、中国式の建物を見たり、ガイドさんが話している中国の歴史を聞いたりすることにワクワクしている

自分に気付いた。その時、私は中国の歴史が好きで自分を思い出した。上海にある魯迅の墓の字は孫文が書いたものだと聞いた時、ふと孫文がいなかったら今の中国はどのようになっていただろう、と考え込んだ。考え込んですぐに、「いなかったことを考えてもしょうがないが、あの出来事があったから、あの人物がいたから、こうなったと考えることもできる」と思った。その時に、上海から日本にいる両親に電話をして、「浪人する」と告げた。人生においては「浪人」、夢においては「歴史」という寄り道をするための、新たな切符を手にした瞬間だった。

私は今のところ、文学部で学ぶことが直接的に社会や人のためになることは少ないと思っている。私が大学で学ぼうと思っている歴史は過去の話であり、過去の人や出来事を学ぶことが現代社会や現代人の役に立つのかと言われると、言葉に詰まる。友人に文学部に進学したことを告げると、「何を勉強するの?」「なぜ文学部?」と聞かれる所以はここにあると思っている。しかし、文学部で歴史を学ぶことは、過去の人や出来事を掘り下げるだけではないと思っている。その過去の人ややったこと、出来事を現在や未来にどのように活かすのかを考えると、大学で歴史を学ぶということだと思ふ。

過去の出来事を学んで、現代や未来に活かすということの1つの例として、戦争が挙げられると思う。「戦争をしてはいけない」という言葉の裏には、壮絶な歴史と人々の思いが込められている。しかし、「なぜ戦争が起こったのか」「人々は何を求めて戦争を起こすのか」「前兆はあったのか、あったとすればどのようなものだったのか」などを知らなければ、再び戦争が起こってしまう可能性がある。現に世界では、いまだに戦争が起こっている地域がある。私は以前、昨年亡くなったペシャワール会の中村哲さんの講演を拝聴したことがある。現在も紛争

が続いているアフガニスタンを中心に活動され、その活動の内容やアフガニスタンについて講演をされた。講演を拝聴していて、西アジアなどの地域で起こっている争いは、宗教や歴史、国家などが複雑に絡み合っていることに気付いた。これらを丁寧に解きほぐしていくことが、事態の緩和につながるかもしれない。

大学生になった友人が大学生活を楽しんでいることを感じながら、私は私なりに充実した浪人生活を送っていた。苦しい時期もあったが仲間と乗り越え、19歳の春、大学生になった。上海で行き先を変えた切符を手、大学という経由地点に到着した。しかし、到着した途端、暗雲が立ち込めた。新型コロナウイルスである。入学式は中止になり、引っ越し作業を終えてすぐに実家に戻った。授業はオンライン授業になり、憧れのキャンパスライフが遠ざかる中、多くの人は「せっかく大学生になったのに、残念だね」と言った。しかし、私は残念だとは思っていない。

現在、世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルスもいつかは世界の歴史になる。未来の受験生が、解答用紙に「新型コロナウイルス」と書く日が来るのである。そして私たちは良くも悪くも「コロナ世代」と命名されるのだろう。私たちは現在、世界の歴史の転換点にいる。在宅ワーク、オンライン会議、オンライン授業、テイクアウトなど今まで主流でなかったものが主流になり、人々の生活様式、仕事形態を大きく変えている。これからは、在宅ワークやオンライン会議が今まで以上に活用されるかもしれない。教育現場においてオンライン授業が主流になることはないかもしれないが、例えば、不登校で学校に行けない子供たちや病いやけがで学校に行けない子供たちにとっては、最適な学習ツールになるかもしれない。在宅ワークが増えたことで、家族の時間が増えたり、家事・子育ての分担が変わったり、それによってストレ

スが軽減したり、増大したり。新型コロナウイルスが流行したことで、私たち人間は多くの変化を経験した。この経験を単に「未曾有のウイルス被害」で終わらせるのか、「未来への教訓」にするのかは現代を生きる私たちの手にかかっている。過去の人々が過去の出来事を記録し、未来の私たちに伝えてくれたように、現代の私たちも現状を記録し、未来に残していかなければならない。何十年後、何百年後に再び今回のように世界中で何らかの病気が流行したとき、未来の人々が2020年を教訓にできるのか。私たちは今、歴史に名を刻むチャンスを与えられている。この状況下において、過去の人々ではなく私たちが当事者として未来に歴史を残せるのである。だからこの状況を残念だとは思わない。ただ、友人がいないことが寂しい。

これからの世界がどうなるのかは分からないが、私が学生生活でチャレンジしようとしていることはたくさんある。まずは言語の習得である。特に大学生の間に中国語をマスターしたい。中国の歴史書を原書で読んだり、中国で現地の人と直接中国語で話したりできるまで勉強したい。さらに日本語、英語、中国語以外に少なくとも2つ以上の言語で読んだり、書いたり、話したりできるようになりたい。また、留学をして視野を広げたい。海外に行って多くの人と交流したり、日本ではできない様々な経験をしたりして、新たな考え方や価値観を手に入れたい。他にもたくさん挑戦したいことがある。そしてこれから大学生活を送る中で、新たに挑戦したいことが出てくるだろう。ただ1つ私の中の軸として大切にしたいことは、大学生活で学んだことを自分のためだけに使うのではなく、他の人や社会のために使うということである。何のために歴史(過去)を学ぶのか、学んだことや経験したことを未来にどのように活かしていくのか、ということ常々自分に問い続け、過去・現在・未来を一連の流れとして捉えていく。こ

れこそ私が、文学部だからこそできると思っていることであり、文学部で学びたいことである。

これから、私は何度も持っている切符を新たな行き先への切符に持ち替えるだろう。切符ではなく航空券になるかもしれない。何がきっかけで行き先を変えるのかは、私自身からない。上海で急に思い立ったように、大学生活を通してまた急に思い立つかもしれない。むしろ大学ではそのようなきっかけに多く出会いたい。ゴール地点は決めていない。ただ、ゴール地点には、学校で1日中過ごすことができ、勉強も満足にできて、キラキラとした笑顔を見せてくれるカンボジアの子供たちや、生きていくことさえない地域で小さなことでも楽しいことや幸せを見つけて笑顔になっている人々に囲まれている私がいることを想像している。今はまだゴール地点は視界の中には入っていない。今の地点から遠いところにあるのだろう。私の旅はまだ途中である。

* 作品は原文のまま掲載しています。

佳作

2020年、文章と関わる

伊藤 和音 (1回生)

私の学生生活は実感なく始まり、今もなお明確な実感なく大学生という身分を過ごしている。ニュース番組で映っていた高校球児も、スポーツやダンスはたまたクイズに全力をかけている高校生も、皆年下になってしまったことが信じられないくらい、気分はまだ高校生のままだ。

新型コロナウイルスの影響で入学式がなくなった。一度もキャンパスに通えず、大学生らしい活動もサークルもできず、授業は日々自宅でパソコンの画面を凝視し続けた。試験よりレポートに追われる期末がどれほどイレギュラーなのかも分からず、境目もないくらいぼんやりと夏休みに入った。

授業は映像を見聞きすることがメインで、学んでいるというより教わっているという感覚が強い。ドキュメントファイルのレジュメを読み、動画に載っているパワーポイントの説明を読む。授業によっては何名かの先生の顔を知らないまま終わってしまったものもある。課題の多さや授業内容の面白さを共感できる友人は少なく、多くの同期の顔は画面越しでしか知らない。SNSでは利用者のみだがわずかながら交流があり、課題が難しいだとかそれっぽいことを呟けば、おそらく同じ授業を受けているだろう仲間から「いいね」がくる。おそらく「分かる～」みたいな意味だろうと取り、その共感に安堵を抱く。

今の学生生活には同期や先生など、誰かとの会話をするという日常が欠けている。対話で得られる刺激や自分の変化などが欠けた大学生活だ。今のところ文章を中心に回っている大学生生活は、有機的だとは到底思えない。レジュメの

ドキュメントファイルや授業関連の書物、誰かの考え方や研究結果、吸収すべき知識に SNS のひとりごと。それらは皆、目に見える形になった状態で私のもとに届く。私は文章で課題に取り組み、先生に連絡や質問をし、試験問題を解き、その近況を SNS に文章で放つ。文学部は文章に多く触れ合うので、想定内ではあるのだが、この文章たちが届けてくれるものはあらゆるものにおいてそれらの「一部」であると私は考える。その文章になった際に考えられた過程や止揚される前の意見などが欠けている。しかし結論は確実に伝わってくる。

では、こんな性質を持つ文章はコミュニケーションツールに、とりわけ会話と同等のコミュニケーションになり得るのだろうか。本文において、コミュニケーションの定義は「言葉・文字などによって、たがいに思想・意思などを伝達・交換すること」(旺文社 国語辞典 第十版)とする。

夏休みに入ると授業を通じて多少あった同期とのかかわりは全くと言っていいほどなくなってしまった。SNS で発信されたその人の生活をなぞった文章に「いいね」を押してみたりするが、綴られた文章は何を伝達するつもりで書かれたものか分かるのだろうか。「いいね」で互いの意見を交換できているのだろうか。

また、LINE などではどうだろう。交流のある同期との会話は大抵 LINE です。話し言葉の感覚で打つ文章には、気づかぬうちに思わぬ誤解が生まれることや、間違っただけで伝わってしまうこともあるだろう。文章の中に秘められた話者の感情の息遣いが、しっかりと伝達しきれていないのではないかと考えてしまう。画面上の

言葉ににじんでいるものはその人の全てではないのに、会話のような意思疎通ができるのだろうか。当人の表情が見えず、話題の誇張も矮小も気づかれにくいならば、感情を最大限に伝えるコミュニケーションにならないのではないだろうか。

繰り返すが、文章は「一部」であると私は考える。SNS で同意する意思のほんの「一部」や会話の中にある感情を共有する言葉のうちの僅かな「一部」を示している。その一部は「表面」と言えるかもしれない。表面だけでは会話にならないのではないだろうか。

その「表面」から理解したのも「一部」にしかかなり得ない。その表層のみで全てを理解した気になって、内面に隠されたものに気づきもせず、口悪く攻撃する人だっている。その感情が文字となって発信されると、それも思った過程を排除された感情の「一部」でしかない。しかし、そこに負の連鎖は生まれてくる。SNS の誹謗中傷などがそうだ。これらの事象は度々世間を騒がせてその都度に議論を生み、思いやりに欠けているという言われ方をする。そこには、一方的に世に放つ SNS などの文章が「コミュニケーションとして相手と過不足なく伝え合っている」というバイアスがかかっているのではないか。伝達しきれていないやり取りをコミュニケーションだと思ってしまうのは、SNS が広く普及した時代の弊害といってもよいかもしれない。

では、文章は会話と同じようなコミュニケーションに全くなり得ないのだろうか。

文学部は人が書いた文章に触れる機会が他よりも多いと言ってよいだろう。例えば小説やエッセイは、筆者や登場人物の目線でその人の感情や物に対して抱いた印象を文章に多く含んでいる。その文章が人目に触れるまでには推敲や加筆修正といった過程を含み、即時性に優れた SNS に比べて、より生の感覚に近い言葉で

伝えようとする意志を感じ、克明に記された感情があり、そう感じるに至った思考の経緯を読み取ることができる。これは「思想・意思などを伝達」できているのではないだろうか。また、読み手である我々が受け取った文章を飲み込み、消化し、自分なりの言葉で解釈した内容や感じたことを書き連ねれば、こちらも「思想・意思などを伝達」できているのではないだろうか。

筆者の意思を受け止め、筆者の感情に自分の感情を示す。それを思考して書く。ここにコミュニケーションは成立していると言える。

これらを受け、文章は会話と同等のコミュニケーションになり得るのかという命題について、再度迫っていく。

その答えを私は「半分イエス」としたい。

SNS においては言い切ることはできないが、文章作品を介したやり取りはコミュニケーションに数えることができる。また、筆者がその文章を書いたときと読み手がそれを読んだときには時差が生じる。これが吉と出るとき、人間は時を超えて思想と会話をすることができよう。

しかし、半分イエスである以上、残り半分はノーであることは言うまでもない。文章はコミュニケーションであるが、会話と同等とまで言い切ることはできない。会話は「二人または数人が、互いに話したり聞いたりして、共通の話を進めること」(スーパー大辞林 3.0)だとされる。コミュニケーションの「思想・意思などを伝達・交換すること」のうち、「交換」を意味するものが会話ではないだろうか。

そのため、一方的な発信である文章は会話と同等のコミュニケーションにはならない。文章には繰り返す双方のやり取りの役を持ちえないのだ。学生が出した読書感想文を読んだ先生の感想文はつかないように、ある文章に反応したところにさらに反応が来ることはないだろう。伝達の条件を満たし、コミュニケーションと言

えるはずの文章作品が、「会話」になり切れな
いのはこういった「交換」能力の不足だ。

文章が完全なコミュニケーションでないとき、他のコミュニケーション手段として「会話」は欠かすことができない存在だ。しかし、やはり人々は対面していない会話であっても、伝え合おうという意味が必要だと私は考える。「会話」は相手と「交わす」ものなのだから。

その点、SNSはどうだろう。ここで再びSNSを検討する。とあるツイートにリプライが連なっていけば、そこには充実した意見の「交換」が生まれる。「思想・意思などを伝達・交換すること」というコミュニケーションが成立しているのだ。時に過激な言葉が飛び交うこともあるが、好きを同じくした同志たちが仲間との出会いに喜ぶ瞬間もそこにはある。SNSには時に思いやりが欠けるが、思いやりがちゃんとあれば人の輪が生まれ、会話として「互いに話したり聞いたりして、共通の話を進めること」ができるだろう。

「思いやり」とは、文章として表に現れているものに人と直接会話する際に感じ取れる話者の呼吸を読み取ろうとするものだ。その言葉を紡ぐまでにどれほど時間がかかったのか。適する言葉を模索して次の句を続けるまでに何度言い直したか。そういう過程を乗り越え「結果」になった文章に対して、筆者や発信者の意思を正しく読み取ろうという働きかけだと私は考える。また、自分の気持ちを正しく相手に伝えたいという意味も「思いやり」になると考える。「思いやり」を持つことができれば、文章の奥に隠れた感情を読み取ることができるようになるだろう。

私はこの文章を通して、コロナ禍に飲まれた大学生活で機会を失い続けているコミュニケーションや会話の重要性を論じている。論じるにあたってさらにその重要性を感じ、自らコミュニケーション能力や会話能力を高めようという

意思を再認識した。文の内奥に迫るには、数々の文章作品に触れて表現の手段をたくさん身に着けることが欠かせないだろう。文学部生となった今、たくさんの繊細な文章作品に触れて「思いやり」の能力を高めるチャンスにあふれている。相手とより濃密な会話ができるように、人の思いを汲み取れ、自分の考えや思いをしっかりと伝えられる人になりたいと考えている。そのために、文学部生として、一人間として、文章と関わっていききたい。また、終わりの見えないコロナ禍で会話と同じくらい相手と密にやり取りができるように、繊細な表現力を持った力強い文章力を鍛えたい。

Face to Faceの対話しかできなかった時代から、電話、メール、SNSと、技術の発展とともに会話の相手が見えなくてもやり取りできるツールが広く普及する時代になった。良くも悪くも相手が見えないことで、会話をしているという概念からツールを利用しているという概念へシフトしているようにも見受けられる。その過程で相手という存在が喪失し、「思いやり」の欠落が叫ばれるようになった。また、コロナ禍で直接人と会う機会も減って、「会話」は人々の環境から減少しているだろう。しかしそのような中で、たとえ離れていて相手が見えない状況にあっても、しっかりと相手に届けたいという意味と「思いやり」を持って、私の言葉を相手に、伝えたいあなたに届けられる人間になりたい。

* 作品は原文のまま掲載しています。

佳作

4年半の不条理

井野 成実（哲学専修 4回生）

表の顔では、合理的であることやポジティブであることが求められる。けれども、私たちは心のどこかで既に人生は不条理であるということを知っている。それでも私たちは社会的存在であるので、そうした矛盾を抱えながらも自分を社会に溶け込ませるようにその不条理に蓋をして生きていく。

文学の役割とは社会ではタブーとされているそうした不条理の蓋を開け、その得体のしれないモンスターを他の人もおいしく食べられる料理に仕立てあげることだと考える。

高級食材とされているキャビアだって、サメの卵という生命の塊を味付けして大きな白いお皿に小さく盛り付けてさもお上品に出てくるではないか。文学も同じことで、生きていく中で出会う直視するにはグロテスクだけれども私たちへの衝撃という食べ応えがたっぷり詰まったコンテンツを美味しく調理するのだ。

社会的に大学生活で学んだことや思い出を語るならば、誰々への感謝や失敗から学んで次の成功に活かしたなんて就職活動で喜んで語られるエピソードになるだろう。けれども、大学生活で起きた不条理は一体どうなるのか。他の人にそのままぶつけたって、言わばただの愚痴である。嫌な顔困った顔されるのがオチだ。そこで、文学の力を借りて私の4年半の大学生活の不条理を消化したい。

そもそも私が大学を卒業する2020年の9月末で私はちょうど24歳になる。世間様は遅いとか怠惰だとか言うだろうが、私からすればそんなとんでもない！と言い返したくなる。私はそもそもスタートラインが違えば途中で何度も

向かい風が吹いていたのだと。私と似たような境遇の人は進学校の高校と一流大学？の神戸大ではなかなか見かけなかった。ほとんどの人は勉強に専念できるような環境が整えられて、ご両親がいて、お金がないとはいっても地元を離れて一人暮らししているからとかで、長期休みには実家に帰る。

そんな当たり前は私にはなかった。中高生の時に父親は引きこもり、仕事を辞めて経済的にかなり苦しくなった。中学はいじめも受けたし、休み時間に話す相手もいないので勉強していた。そうすると地元でいちばん賢いと言われる高校に行くことになった。これまで大学なんてお金持ちの家で賢い人だけがいくところで私には関係ないと思っていたのに、高校では偏差値の高い大学を目指せ、勉強しろと迫られた。周りの人は言われるがままレールの上を走っていくのが上手い人ばかり。兄姉もそうだから両親もそうだから当たり前だと思っている。私はギャップの大きさに打ちひしがれて学校に行きたくなくなった。勉強をすればできて学ぶことも楽しいと思っていたけれど、そんなことは過去のことになった3年間だった。毎日のように高校を辞めたいと思っていたけれど、母の一生のお願いを聞いて卒業した。とにかくゆっくりしたいと一年間素浪人（どこにも属さない武士が語源）になった。その時期はたくさん本を読んだり、中途半端にしか高校では勉強できなかったもので独学したり、アルバイトをしながら過ごしていた。これから何をしたいか結論として出たのは、哲学を学ぶことと海外で暮らすことだった。そうするには大学に行くのも悪くないとやっと自発的に大学に行くことを考えられ

るようになった。奨学金を背負いたくないという消極的な理由で、気の狂った父から逃れる家に母と一緒に住むためという積極的な理由でも神戸大学を選んだ。

家族の負担が少なくなるようにこの大学に通ったつもりだったけれど、悉く家族から仕打ちを受けることになる。大学に入学する頃には父親がアルバイトも始めて外に出られるようになっていた。別居していたけれど、私と母が住んでいる家の郵便物を触り、勝手に家に入ってくるのがあった。そこで大学の保護者会の案内を見つけ、私は母子家庭として授業料免除を受けているのに、父親として出席するだけでなく質問をしまくるので教授に顔も覚えられてしまった。そもそも父親は授業料払っていない。大人しく家で寝ておいてくれた方がよかったのに。祖父が入院中に年金500万円を盗んだのは本当に呆れる。付き合いの間もない見知らぬおばさんを再婚相手としてサプライズで私の前に登場させるなんて本当笑わせてくれる。こんな男と結婚するなんて世の中には馬鹿なおばさんがいるもんだともう哀れに思えてくる。更に、私には姉がいるのだが勿論くせ者だ。父と母が離婚ではなく別居だったのは、この姉が私の経歴に泥を塗らないで！結婚できなくなるから！と反対したかららしい。さてそんな姉はめでたくデキ婚。お相手はどこかの御曹司なんてことはなく、大学生。母は現在孫のために生きていくといっても過言ではなく、もとより小さい子どもが好きなので、姉も義兄も甥っ子もみんな二人用の賃貸マンションに暮らすことになった。ちなみに私は3か月だけと聞かされていたから了承したけれど、えっ1年って言ったよね？と家族一同から騙されたので一生許す気はない。あなたは何も困ってなくて余裕があるから姉のために犠牲になりなさい！家族を大事にさなさい！と母は自分の経験したこと以外は全

く想像もせずあり得ないと切り捨てる傲慢さがある。妊娠や出産は確かに大変だと思う、でも大学生をしたことがない母は大学生の私にもしんどいことがあるとは思わない。こんな状況は不条理で納得いかない私が声を上げて何も変わらなかった。姉が私にかけた言葉は「人生なんかそういうもんや」

そんな理由で家にいたくなくなると、外で人間関係を築こうとした。私は20歳の時多分初めて男の人と付き合った。そいつがとんでもない奴だった。多分と言ったのは中高生の時は、付き合いも3か月とかでお互いに照れて何も起こらないという恋愛だったからだ。そいつは37歳だった。その時の自分は何も分かっていなくて相手を大人で素敵！だと舞い上がっていたけれど、今となってはまともな大人は17歳も年下の学生に手を出したりしないと分かっている。しかもその男は別れるだの、やっぱり俺が我慢すればいいのだからまた付き合いおうだのと情緒不安定。さらに、デートは仕事終わりに夜11時から近くのマクドに冬の寒の中呼び出されて、食べたくもないエビフィレオを食べる。自己中心的。そんなクズを運命の人だと思い続けた2年間ほど無駄な時間はない。でも何が不条理だって、そいつが最後にごもつともなことを言って私を振ったこと。

「あなただけしかいないなんてことはない」ディズニー映画みたいに、私とあなたは結ばれる運命だったのよ！なんてお話の中のこと。100%運命の人なんていない。その代わりに自分と相性の良い人はいくらでもいる。その相性なんて所詮は程度であって、自分たちで変えていくこともできるし、時間によって変わることもある。私にとっては、この人しかいないなんて恋愛で視野が狭くなった病気が言わせることしか思えない。

失恋から立ち直って留学や哲学の勉強に精を出すのだけれどここでもまた上手くいかない。私はそれでも未来に希望を持っていますとか、国際的に活躍できる人材になりたいです、とかを奨学金のために初めは言っていた。段々とその言葉を自分でも信じるようになっていた。実際に留学のための奨学金をもらうこともできた。でも、コロナのせいで留学は志半ばで中断された。留学中も自分なんて…と自信を失うことが何度もあった。帰って来られてほっとしている自分も情けなかった。哲学を勉強すると意気込んだ成果を見せる卒論も自分の納得のいく内容に仕上げるができなかった。自分の力不足でもある。でも、思っていたほどに上手くいかなかったことは失敗ではなくて、自分が立てた目標地点に来て見る景色は、始めに思い描いていた景色と違って見えるだけかもしれない。卒業するときに最後に突き付けられたのは、自分の成長ではなくて未熟さだった。自分はこれでいいとか、ありのまま自分でいいとか思っていたから入学前はあんなに自信満々でいられたのだと思う。まだまだ高みがあると教えてくれた環境や人にはこの大学に来なければ会えなかった。私は5年前に見たいと思っていた景色を見るためではなく、ありのままの景色を見るために精一杯生きていたようだ。それには不条理を受け入れ、それでもなお希望を持ち続けるしかないらしい。

どうしてだろうか。時間で言えば圧倒的に何もない日常を過ごす方が多かったのに、私の記憶の中では日常から逸脱した不条理が大半を占めている。旅行先であったトラブルが思い出に必ず残るのと同じように。私たちはどこかで理屈でも説明できない当たり前から飛び出たところが生きていると感じさせることであると分かっているのかもしれない。そしておいしい料理を食べたからと言って、賢くなるでも偉くな

るでもないように、生命の息吹を感じることでそれ自体が目的なのだ。不条理なんてものは美味しく食べて心を太らせるためにあるのだ。

* 作品は原文のまま掲載しています。

新人賞

不器用な世界

米谷 実紗（1回生）

大変なことになってしまった。2020年、始まったところは東京五輪で盛り上がっていて、まさか、こんな風になるなんて誰も思っただろう。20が二つ並んでいて、視覚的に収まりの言い年号だと漠然と感じた記憶がある。新年あけて、1月1日、センター試験前の追い込みの時期に私が読んでいたのは季節外れだが、芥川龍之介の『秋』だった。3か月後に大学にも行かず、家でカミュの『ペスト』を読むことになるとは思ってはいなかった。

2月末、前期試験のために神戸大学へと向かった。試験中、マスクをつけてもつけなくてもよいとされていた。朝一番、まだ冬のおいの残る六甲の町を私は試験への不安とともに歩いていた。最後の試験を終え、大学から駅についたころには日が陰り始めていたことを覚えている。それから半年、私は未だ神戸大学へ登校したことはない。高校生向けの神戸大学の紹介PVを見て、その中に出てくるほとんどの場所を知らないことに驚いた。パソコンに向かい、課題と格闘する日々。会って話をするのは家族くらいである。6月には妹の通う中学は授業を再開した。周りには、旅行や外食に向かう人もいのに、何故大学は再開されないのか。そんなことばかり考えさせられた。昨日、神戸大学から発表があり、何とか一部の授業で対面授業が始まりそうだという。感染が広がる中で難色を示す方もいるだろうが、一人の学生としては、勉学の機会を得られた喜びのほうが、感染への不安感よりも勝ってしまった。もちろん感染対策は入念にせねばならない上に、以前のようなわけでもないが、やっと始まるのだと思うととてもうれしかった。

私は神戸大学文学部の学生だ。一方で、私は家庭の中では長子である。私のほかには5つ下に妹が一人いるばかりだ。しかし、持ち前の一人っ子気質のおかげで、親の期待を裏切って文学部に来てしまった。本は好きだが、苦手なことは山ほどある。あまり褒められた人間ではないが、文学部に来たことを後悔しない4年間が過ごせたら良いと思う。

私は、ほかの人と雑談をすることが苦手だ。こんなことを書くとおかしな奴だと思われるかもしれないが、雑談が苦手だ。ちなみに、雑談以外なら話すこと自体は嫌いではない。初対面の人とも、年上の人とも、年下の人とも必要に駆られれば話すことは苦痛ではない。雑談にしたって、聞くだけなら楽しいのだ。ただ、自分で話すとなると、困る。席が隣の同級生であっても、同じ部活に所属する友人であっても、雑談をしろと言われると、困ってしまう。適当な相槌しか打てない。この傾向は小学校、中学校、高校と年齢が上がるごとに顕著になった。原因は自分自身黙っていることが好きで、流行に疎いからだからだろう。だから、私はよく本を持ち歩いていた。本は面白かった。自分で好きな時に読めて、色んな想像ができた。無理に周りの人と雑談をせずとも時間は過ぎた。私が気の利いたことを言わずとも本は怒りやしなかった。おかげで私はすっかり本のとりこだ。雑談の不得意な私は、雑談の不得意な私と生きていくことを受け入れた。

私の書く文章にはまとまりがない。だから、とても読みにくい。文章にまとまりがない理由は、おそらくその時の感情をメモするような気楽な気持ちで文を作るからだろう。あまりにま

とまりがないので文章になっているのかよく不安になる。もちろん、多くの場合には、その、まとまりのない文章をもとに何度も書き直す。資料を読み直し、推敲を重ねる。しかし、自分の心の中にある感情を記す場合、私は読みにくい文章を意図的に読みにくいままにすることがある。感情というのは難しい。取り繕おうと思って取り繕えるものでもない。あふれ出す場合もある。しかし、文章にしまうとその様子はガラリと変わって見えることも多い。まず、言葉では追いつかない感情がある。また、文字にするのが億劫な感情は削られる。そして、醜い感情をなんとなくいい感じの言葉に置き換えたい衝動に駆られる。構成を読みやすいように整え、感じのいい題名を付けたころには、出来上がった文章が、もとの感情が何だったのかわからないものになっていることは、よくあることだ。それは、それでまたいいことではあると思う。ある種の感情が反映されて文章が出来上がるのだから。

しかし、もっと純粋な形で文字になっている感情があるのではないかと思っている自分がある。手を加える回数を減らせば、純粋な形で感情を文字にできるのではないかと思い、支離滅裂な文章を支離滅裂なままにしてしまう。でも、支離滅裂な文章では全然言いたいことが伝わらないこともなんとなく感じてはいる。

私は、日記をつけている。今、考えていることや感情は、一年もすれば忘れてしまうことが多い。新しい出会いや経験を通して、人は変わる。思春期真っただ中の高校生の時に、そのことに気が付いて、怖くなって、感情を忘れることがもったいないと感じて、日記をつけだした。何をしたかったわけではない。

私は、不器用だ。賢く生きられるタイプではない。だから、文学部に来てしまった。文学部に来れば、大学で勉強すれば、何か新しいもの見方を得られるのではないかと思い、文学部

に来た。自分では足りないと思うから本を読む。時に、未熟な自分に腹を立てながら、あがく。

そんな自分にとって、大学に入学してから、印象的だった授業が一つある。文学についての授業だ。その授業では、文学的テキストの多義性について扱った。文学的テキストの読み方一つではない。読む人の年齢、性別、思考、そのほか様々な要因によって、作品の読み方は色々で、同じ人が読んでいても、読む年齢によって、読み方は変わるということだった。変わることは何も怖いことではないのだとその時、感じた。私は、不器用な自分を甘やかすことが好きで、でも不器用な自分の苦手な高校生だった。大学に入っても高校生と何が違うのかわからないまま、ふわふわしていた。何か、絶対的に正しい形があるのではないかと思い、正しい形になりたかった。自分のことしか見えてなくて、見たくなくて、でもそのことに気づかなくて、雁字搦めになって焦っていた。しかし、文学的テキストの話聞いて、変わってしまってもいい、完璧を探し続けなくてもいいのではないかと思った。

この新型コロナウイルス流行による自粛生活は、私に非日常をもたらし、緩やかな時間をもたらした。世界は大きく動き、苦しい時間だが、私の内面世界が考え事をするのには向いていた。私は生活音のする部屋が好きだ。扇風機の回る音がして、雨戸が風に打たれてガタガタ鳴る。換気扇の音も、誰かの足音も。そういう中で、考え事をする、プールの中に潜って、体は浮いているときみたいな気分になる。音はあまり聞こえなくて、穏やかだ。冷たくて、暖かい。他人と目を合わせることもあまり得意ではないが、自分と向き合うことの方が怖い。虚勢とか見栄とかそういうものをはがしていくのはつらい。自分が見栄と虚勢だらけなことに気づかされる。弱い部分ばかり見えてくる。でも、自分と向き合うのは大切なことだと思う。前向きに

生きるにも、自身を持つにも、信頼してもらいにも、人とかかわって生きていこうと思うと、己を知ることは役に立つ。ただ、自分のことばかり考えていても分かることなんて限られている。自分のことは考えすぎるとプールの底に沈む、溺れる。一度空気を肺から吐き切る、そして、いっぱい吸い込む。吸い込もうとすると、何故か視線は上に向く。上に向けば、周りが見える。雑談が苦手でも、根性なしでも、意外と自分は一人じゃない。今、この瞬間に部屋に一人だとしても、一人で人間が生きられるわけじゃない。太宰治も夏目漱石も清少納言も谷崎潤一郎も直接会うことはできないけれど、他者だ。家にいれば、いやでも家族には出会う。少し外に出れば、近所の小学生が遊んでいる。スーパーのレジ打ちのおばさんと目が合うこともある。世の中には言葉のないコミュニケーションも色々ある。私は雑談が苦手だ。雑談よりはむしろアイコンタクトが好きだ。でも、言葉が好きだ。足りないところも多い、面倒で、手がかかるけれど、文字が好きだ。人間は苦手だ。でも、無性に人が恋しくなることがある。雑談が苦手な、本に逃げたのに、本を通じて他者と雑談したりする。どうにも変な感じがするけれど、そんなものだ。

本は凄い。人間の嫌いな人が、わざわざ過去の人間に会いに行ったりするわけだから。意外とその人が本当は人間を嫌いじゃないだけかもしれないけれど、でも、本は凄い。文字は、凄い。足りない部分も多いけれど、直接会うことのできない人と私を結ぶ。時間を超えて、場所を超えて、人を結ぶ。

私は器用じゃない、感じも悪いし、愛想もない。器用に見せようと、不器用に生きている。文字は器用に見える。でも、意外と不器用かもしれない。私は文字に魅せられて文学部に来た。これからの4年間、文字を見つめていたい。文学と向き合いたい。それで、雨の日に、困って

いる人にさっと傘を差しだせるような人になれば、素敵だけれど、一生不器用でも悪くはない。

困難にぶつかったときに、人間は文字でそれを後世に伝えた、伝えてきた。感染症と向き合い、不器用ながらも、困難にぶつかったときに折れない人になりたいと思った。人とのつながりを思い出せる人になりたいと思った。

* 作品は原文のまま掲載しています。